

(6) 附属図書館企画展の実施

人文社会科学研究科 大塚 秀明

附属図書館企画展ワーキンググループ

(18年度) 篠塚富士男、平岡 博、岡部幸祐、廣田直美、

落合厚子、金藤伴成、中山知士、峯岸由美

(19年度) 篠塚富士男、岡部幸祐、落合厚子、金成真由子、

中山知士、平田 完、峯岸由美、奥村洋子

1. はじめに

本プロジェクトは平成18年度から開始され、それ以降も継続して設定されている。その目的は「附属図書館が所蔵する貴重な資料及び基本図書を一般に広く公開するとともに、和漢古書等の図書館資料についての大学における研究と活用のあり方を示す」ことである。本稿では、附属図書館と研究開発室とが共同で展示会（企画展）を企画・実施した18年度と19年度の活動について報告する。

2. 筑波大学附属図書館における展示会活動

2.1 これまでの展示会（特別展・企画展）の開催状況

附属図書館では、平成7（1995）年6月に中央図書館新館増築を記念して特別展「天正少年使節と『原マルチノの演説』」を開催した。これ以前にも単発的に貴重資料の展示を行なったことはあったが、この平成7年の特別展から現在のようなスタイルでの展示会の開催がスタートした。そして、これ以後、貴重な資料の現物を広く公開することによって、資料への興味を喚起し、それが図書館資料の活用へとつながることを主要な目的として、継続して特別展・企画展を開催してきた（表1）。

表1 筑波大学附属図書館特別展等開催記録

名 称	主 催 者	開催年月日
天正少年使節と『原マルチノの演説』	附属図書館	H7.6.1-6.8 (8) * () 内は展示日数
宇野文庫展	附属図書館（協力：社会科学系、社会科学研究科）	H8.9.19-10.11 (15)
幕末・明治の生活と教育	附属図書館	H8.10.23-11.10 (19)
明治のいぶき	筑波大学	H9.8.4-8.9 (6)
近代教育学の源流	教育学系、附属図書館共催	H10.9.7-10.16 (32)
身体と遊戯へのまなざし	体育科学系、附属図書館共催	H11.12.6-12.17 (11)
日本美術の名品	芸術学系、附属図書館共催	H12.5.22-6.9 (19)
日本古代の学問と萬葉集	哲学・思想学系、文芸・言語学系、附属図書館共催	H13.10.22-11.2 (12)
「学問の神」をささえた人びと	歴史・人類学系、附属図書館共催	H14.12.2-12.18 (17)
筑波大学開学30周年（創基131年）記念附属図書館貴重図書特別展	附属図書館	H15.9.29-10.10 (12)
オリエントの歴史と文化－古代学の形成と展開－	人文社会科学研究科、附属図書館共催	H16.10.25-11.5 (12)
江戸前期の湯島聖堂－筑波大学資料による復元研究成果公開－	芸術専門学群、附属図書館共催	H17.10.8-10.30 (21)
中国三大奇書の成立と受容－『三国志』『水滸伝』『西遊記』はどのように読まれ、描かれたか－	附属図書館（研究開発室） *企画展として開催	H18.10.2-10.27 (22)
古地図の世界－世界図とその版木－	附属図書館（研究開発室） *企画展として開催	H19.10.1-10.26 (22)

表1から、これまでの展示会における主催者・共催者（延べ数）の内訳を抜き出したものが表2である。

表2 主催者・共催者内訳

筑波大学	: 1
附属図書館	: 13
(研究開発室: 2)	
学内の教育・研究組織	: 10

このうち筑波大学が主催している展示会が1回だけある（平成9年）が、これは学外（東京）で開催した展示会であり、この時は図書館の展示の他に、大学の広報関係の資料も会場に準備された。この展示会は、東京での開催ということもあり6日間で3,800人を超える入場者があったが（後掲表6参照）、図書館資料を公開する機会に大学に対する関心も高めてもらおうという大学

側の狙いは十分達成できたものと考えられる。また、学内の教育・研究組織との共催・協力が8回（延べ10組織）あるが、これらはほとんどが共催組織から図書館に企画が提案されたものであり、共催組織と関連のある学会の開催と連動して出された企画もある。こうした展示会においては、おおむね、企画や図録の執筆等を教員側が行い、広報や実際の展示準備、電子展示等の実務は図書館側が行う、という形で作業を分担してきたが、このような「持ち込み企画」が多いのも、図書館で毎年特別展を実施してきた実績が学内で認められてきた結果であるといえよう。

2.2 18年度・19年度の企画展の開催

表1のうち、平成17年度までの展示会は、すべて特別展という名称で開催してきたが、18年度・19年度の展示会は企画展という名称での開催となった。これは、これらの展示会が他組織との共催ではなく、附属図書館と本プロジェクト（研究開発室）との連携のもとに企画・開催されたこと（すなわち「持ち込み企画」ではない図書館主体の企画であったこと）による。図書館が主体となって開催した展示会は過去にもあったが、研究開発室との連携による開催は新たな試みであった。

こうした形での実施の趣旨について、18年度の企画展（「中国三大奇書の成立と受容—『三国志』『水滸伝』『西遊記』はどのように読まれ、描かれたか—」の「ご挨拶」（図録に収録されている）において、植松附属図書館長は大略次のように述べている。

- ・「特別展」は、これまで学内の教育研究組織の支援を得て附属図書館と当該組織との共催の形式で開催してきた。教育研究活動の成果と、附属図書館の所有する貴重書を中心とする資料展示との連携は、毎回学内外からの多数の来場者に高い評価を得てきている。
- ・今回は、これまでの「特別展」とは趣を変えて、附属図書館と研究開発室とが共同で「企画展」を開催する。図書館主体の企画であること、貴重書だけではなく基本書を中心とした構成であることが特徴である。（基本書は）本展示会が終了すれば館内の所定の書架に戻され、閲覧や館外貸出にも供せられる。
- ・この企画展を通して、利用者にあまり知られずに眠っていた資料、手に取られることの少なかった書籍が日の目を見て、活発に利用されれば幸いである。

この中に本プロジェクトの目的が端的に集約されているが、「図書館主体の企画である」ことにより、図書館がテーマを自由に設定してストーリーを作成し、そのストーリーの展開に即した形で展示資料を選ぶ、という方法を前面に押し出すことができるようになった。そのため、「貴重書展示室」を会場としながらも、必ずしも貴重書を中心に展示することにこだわることはなくなり、ストーリー展開上の必然性があれば、どんな資料でも（たとえばマンガでも）展示することが可能となったが、これによって展示の幅が広がり、観覧者の層の拡大という効果をもたらしたと評価できよう。

しかし、これはもちろん従来行われてきた「学内の教育研究組織との連携による、研究教育活動の成果に基づく貴重書を中心とする展示」という特別展のスタイルを否定するものではない。常設展のほかに、特別展と企画展という性質の異なる2つの展示会の方法を確立することによって、その時々状況に応じて柔軟に様々な展示会を企画・開催することが可能となるが、これによって図書館展示の可能性が一層拡大してい

くものと考えられる。こうした図書館展示の方法論や評価に関する問題も本プロジェクトの重要な研究課題の一つである。

2.3 近年の大学図書館における展示会の傾向

図書館の記録・報告等を調査すると、大学図書館では古くから、またいろいろな形で展示会を開催していることがわかる。表3は、これらの展示会の中からA群として特に展示会開催の歴史が長く回数も多い大学を、B群として展示内容・スタイルに特徴のある大学を適宜ピックアップしたものである。B群のうち、熊本大学と岡山大学は歴史史料として質量とも全国でも有数のコレクション（熊本：阿蘇家文書・細川家北岡文庫等、岡山：池田家文庫）を所蔵しているという特徴を生かし、これらを中心とした展示会を継続して開催している大学である。この両大学は、実質的に歴史系博物館と同様の展示会活動を展開している。また、

表3 大学図書館が主催する展示会の開催状況

大学名	展示会開催記録	開催回数
(A群)		
京都大学	明治33 (1900) 年～	120回以上
早稲田大学	明治40 (1907) 年～	200回以上
天理大学 (天理図書館)	昭和5 (1930) 年～	250回以上
(B群)	* 近年開催分に限定	
熊本大学	昭和59 (1984) 年～	24回 (以上)
岡山大学	平成9 (1997) 年～	11回 (以上)
東京大学	平成6 (1994) 年～	13回 (以上)
筑波大学	平成7 (1995) 年～	14回

表4 展覧会の目的 (松下による)

<p><展覧会の目的 (松下真也)></p> <ol style="list-style-type: none"> 1) メモリアル・セレモニーとしての展覧会 (例：大学・図書館等の記念行事の一環としての展覧会) 2) 教育・研究目的の展覧会 (例：学会開催と連動した展覧会) 3) 図書館の広報・利用者教育の一環としての展覧会 4) エンターテインメントとしての展覧会

東京大学と筑波大学は、それぞれマルチメディア展示・電子展示の名称で展示会の内容をインターネットでアクセスできるように公開している大学であり、熊本・岡山が展示内容に大きな特徴を持っているのに対し、こちらは展示会のスタイルに特徴がある大学として例示したものである。

これらは、それぞれの図書館等の報告によってまとめたもの¹なので、展示会開催期間も1日だけのものから3ヶ月以上のもので様々であり、図書館以外の場所(=館外・学外)で開催したものも含まれている。また、限られた記録類を参照したものなので、開催回数等は実際はもっと多い可能性が高く、ここであげた回数等は参考値というべきものであるが、これらの報告が対象としている展示会は、各図書館とも図書館が開催/関与する「展示会」であり、常設展は原則として含まない、という位置づけによってのものと考えられる。そこで、これによって図書館展示の歴史と現状について考えてみたい。

表3に見るように、大学図書館における展示会は古くから行われており、個々の展示会の出品リストや目録・図録等にそれぞれの展示会の目的や意義等について記載されていることはあったが、個々の展示会を離れた形での「大学図書館(一般)における展示会」について、その目的や意義に関する議論はあまり行われてこなかった。そうした状況の中で、早稲田大学の松下真也は、展覧会の目的として4つの分類を提示した論考を1996年に発表した²(表4)。そして、これまでの展覧会としては1)、2)のタイプのものが多いが、「展覧会という形式でメッセージを伝える」ような3)のタイプのものや、さらには、4)の「利用者の娯楽」のための展覧会も企画されてよいのではないかと述べている。松下は2003年に再び展覧会について論じているが、その中では、早稲田の近年の展覧会は従来多かった1)、2)のタイプのものから少しずつ意識的に傾向を変え、おもに学部学生を対象とした、たんなる貴重資料の羅列ではない多様な展示を試みるようになった、という趣旨の記述をしている³。これは、1)、2)のタイプの展覧会はもちろん行いながらも、この7年の間に3)や4)のタイプも重視する傾向に移行しつつあることを示している。

ここで示された見解は、大学図書館における展示会の目的を論じたものとしてよくまとまっており、3)や4)のタイプも重視する動きは早稲田以外の大学の近年の図書館展示においても、展示の実務を担当し

た図書館職員が実感として感じていた変化でもあったが、松下の4つの分類はこうした動きに一定の理論的根拠を与えるものであった。そこで、この松下の分類を念頭において、表3でA群としてピックアップした大学の事例を見ていくと、まず展示会の名称では、戦前期（明治・大正・昭和戦前期）には1）に相当するもの（「記念」の文字が含まれるものや、皇族や教育関係者の来館に伴うものなど）が圧倒的に多い。また、この中にはもちろん2）の目的もあわせもったものも多かったであろうことは、その名称からも察することができる（例：沙翁三百年記念（大正5年4月・早稲田大学）、日本書紀編纂1200年記念（大正8年5月・京都大学）など）。一方、戦後になると

- ・（開催記録から見ると）戦前よりも開催頻度が非常に高くなっている
天理は戦前から毎年開催していたが京都・早稲田が毎年開催となったのは1947年以降である
- ・学部・学会等との共催が増える

という変化が見られ、2）の教育・研究目的の展示会の開催が大幅に増加していくという全体的な傾向が見られる。そして近年については、前述のように1）、2）のタイプの展示会はもちろん行いながらも、3）や4）のタイプも重視する傾向に移行しつつあるという変化が起きている。

この3）や4）のタイプの増加傾向に関連して、東北大学の木戸浦豊和は、松下の分類を紹介しながら、松下の分類は「大学の構成員に向けた展示会」を想定しているが、大学の外側に向けた目的＝大学図書館の地域貢献という観点で考えると、この4つの分類に「生涯学習の場としての展示会」を付け加えることができ、このような目的を想定すれば、「魅力的な展示会のために」テーマ・ストーリーの工夫や資料の見せ方の工夫、エンターテインメント性といったものを考慮する必要があると述べている⁴。これは、地域貢献・生涯学習を重視する立場であるが、近年の東北大学の企画展の趣旨や、こうした同館の実践を背景に図書館展示の意義について論じた米澤誠の論考⁵をもふまえたものであると考えられる。米澤の論考では、図書館展示の意義として次の3点があげられている。

＜図書館展示の意義（米澤誠）＞	
1.	啓蒙活動としての図書館展示
2.	広報活動としての図書館展示
3.	人材育成活動としての図書館展示

ここでは、展示に関連する対象者・グループを三つに大別し、それぞれの立場からみた意義を分析しているが、これを簡略化すると表5のようにまとめることができよう。

表5 図書館展示の意義（米澤の論考から作成）

展示のねらい	対象者・グループ	展示の意義
啓蒙活動	展示会観覧者・利用者	資料への興味・知識欲の向上・図書館資料の活用
広報活動	図書館・大学	社会へのアピール・地域貢献
人材育成活動	図書館職員	企画力・専門的知識・活性化

このように、展示会に関わる対象者・グループをフラットなとらえ方で把握し直すことにより、展示会を観覧者に対する（広い意味での）啓蒙・公開活動としてのみ考えがちな従来の考え方・発想からの転換が示されているが、これによって、図書館展示には視点の違いによって多様な意義を見出せることが明らかになった。こうした複合的な観点は、松下が3）4）のタイプの重視の傾向について述べていることとも相通ずるものであり、近年の大学図書館を取り巻く状況に対応した分析であるといえる。

展示会を地域貢献（地域文化振興）の機会ととらえる考え方は以前から存在した。しかし、国立大学においては、展示会活動にも法人化の影響が大きく表れ、社会連携・地域貢献を重視する立場に立つ展示会の開催を企画する大学⁶が増加している。すなわち、法人化後の国立大学では、法人化前にいわれていた「大学の公開（開かれた大学）」という視点から、さらに一步踏み込んだ「大学の社会貢献（地域社会、国際社会への貢献）」が大きな使命として求められるようになってきているが、図書館もこれに呼応する形で、社会連携・貢献事業として展示会・講演会・シンポジウムを位置づけ、積極的に推進しようとする動きが明確に表れており⁷、大学図書館における展示会の理念・目的を考える上で、国立大学法人化は一つの画期となっている

といえよう。

3. 18年度・19年度企画展

3.1 平成18年度企画展

3.1.1 企画展の名称と目的

18年度の企画展は「中国三大奇書の成立と受容—『三国志』『水滸伝』『西遊記』はどのように読まれ、描かれたか—」という名称であり、開催の目的は「中国三大奇書に関する貴重な資料及び基本図書を『成立と受容』という観点でピックアップして一般に広く公開するとともに、和漢古書等の図書館資料についての大学における研究と活用のあり方を示すこと」であった。

本企画展で我々が規定した「中国三大奇書」⁸は、日本でも江戸時代以降広く親しまれ、現在でも図書や雑誌だけでなく、テレビやゲーム等によってもきわめてポピュラーなものになっている。このため、企画展の会場としては本学中央図書館貴重書展示室を使用した⁹が、貴重書だけを展示したわけではなく、従来はほとんど展示の対象としていなかったマンガや映画・アニメ関係資料等についても、展示のストーリーの上での必然性があれば、展示品に加え、あるいは会期中に開催した講演会で取り上げた。その結果、「たんなる貴重資料の羅列」ではなく「教育・研究」から「エンターテインメント」までの要素をも含む、多様な見方のできる展示を行うことができたと考えている。

また、図書館の企画展であると同時に本プロジェクトの一環でもあるという位置づけから、従来の特別展よりも自由度が高く、実験的な試みも行うことが可能になった。さらに、本プロジェクトの課題の中には、図書館資料の保存等に関する調査・研究も含まれているので、展示会を行うことの客観的な評価や、図書館展示が資料の保存・公開・活用にどのように影響するか、あるいは資料を活用した研究のサイクルの中で図書館展示がどの程度有効に機能するか⁹等の問題について、今後も継続して研究・実践する場が確立できたことになる。こうした点で、研究開発室と連携した初めての企画展を開催できた意味は非常に大きかった。

3.1.2 企画展の実際

この企画展は、実質的に研究開発室の大塚室員+図書館職員8名（企画展ワーキンググループ）の9名（以下、この9名の体制を実施グループと呼ぶ。）で実施された。実施グループのメンバーは、もちろんそれぞれ本務を持っているので、グループ内部での連絡・議論はほとんどメーリングリストで行い、顔をあわせる形の会議は最小限にとどめた。

テーマは、大塚室員の専門との関係もあって早い段階でおおむね決定していたが、展示会は中央図書館で行うこと、開催期間には多くの学外者の来館が期待できる学園祭の期間を含むこと、という2点の前提条件があることをまず確認した上で、開催期間設定の事情を考慮して、観覧者としては（この分野の専門家ではない）一般の方を想定して企画することを基本方針とした。そして、従来の特別展と同じように、この企画展においても、①（貴重書展示室における）展示、②図録の作成、③電子展示を行ったほか、④講演会（2回）を実施した。また、③の具体的な内容となる企画展ホームページ（電子展示）¹⁰のコンテンツとして、従来も実施していた「PDF版図録」の作成・提供のほかに、

- ・図録をベースにデジタル展示として再構成した「展示内容」
- ・会期中に観覧者等から寄せられた質問に答える「三大奇書Q&A」
- ・企画展のスタッフがお知らせしたい様々な情報を同時進行の形で伝えていくことを目指した「企画展 Blog」

の三つを新たな試みとして実施した。

これらの試みのうち、「展示内容」は当館の「電子展示ならではの機能を生かして、通常の展示では提供できない新たな情報を付加して公開」する、というコンセプトにそったもので、展示品の解説や画像の他に所蔵情報や関連リンクが付されている。また、Q&AとBlogは、

- ・(図書館側の一方的な情報提供だけではなく) 観覧者等との相互交流をはかって、会期中でも可能な限り質問・要望等に応じていく
- ・こうした質問・要望に対する回答や、企画展に関する様々な情報を、迅速にwebで公開することによって、多くの関係者(観覧者、図書館、電子展示の閲覧者等)の間で情報を共有する

という趣旨で行うことにしたものである。従来も展示会場にアンケート用紙や感想記入用のノートを置く、といった形で観覧者の声・感想を聞いたことはあったが、そうした感想等は基本的には「次回の展示会の参考にする」という形で利用しており、会期中にこうした情報を観覧者等にフィードバックする「仕掛け」は用意していなかった。しかし、これらを用意したことによって、Q&Aでは質問に答える形で図録の内容・解説等の補足を、Blogでは開催前の準備段階から企画展終了後の状況までの様々な情報を臨機応変に発信することができた。またBlogではコメントを介してリアルタイムで観覧者等の反応に触れることも可能であり、コミュニケーションの場としても有効であることが確認できた。

展示内容の詳細については、「PDF版図録」等に譲るが、前述のように展示のストーリーの上で必然性があればマンガ・ゲーム等も展示品に加えたこと、同様の理由でインターネットで公開されている画像や他機関(博物館)所蔵資料等も許諾を得てパネルにしたこと、地域に関係した資料(『筑波水滸伝』や小川芋銭の

絵画など)を積極的に展示に取り入れたことなど、これまでは行わなかったような実験的な試みも行った。幸いこれらの試みの趣旨は観覧者に理解され、好評を得ることができた¹¹⁾。

また、このような試みに代表されるように、図書館主体の企画ということで、たとえばポスター・図録等のデザインや電子展示の構成など、スタッフがそれぞれの創意工夫で主体的に企画展に関わり、自由に企画展を創りあげることができた。こうした作業は本務を持つ実施グループのメンバーにとっては確かに時間を要するものであったが、各自の創意工夫が即座に企画に反映されるという意味でやりがいもあり、スタッフそれぞれが楽しみながら企画展に参加することができたと思う。これは実践を通じた人材育成活動という意味を持つものであり、活動できる時間が限られていることが、かえって、各人の様々なアイデア・専門知識・デザインセンス・DTPのスキル等の(潜在)能力の発揮や、実施グループの団結・一体感を持った目的遂行に有利に働いたという側面があった。



図1 弘前の「ねぷた」の画像(インターネットで公開されているもの)のパネル展示風景

3.2 平成19年度企画展

3.2.1 企画展の名称と目的

19年度も18年度に引き続き企画展が開催された。19年度の企画展は「古地図の世界—世界図とその版木—」という名称であり、開催の目的は『重訂万国全図』の版木を中心に、附属図書館が所蔵する古地図を一般に広く公開するとともに、古地図を含む和漢古書等の図書館資料についての大学における研究と活用の方を示すこと」であった。

本企画展の目玉となった『重訂万国全図』の版木とは、19年度になってから図書館に寄贈されたもので、

安政2（1855）年に幕府天文方によって作成され、明治4（1871）年に大学南校によって修訂された世界地図（『重訂万国全図』）の版木（図2）である。

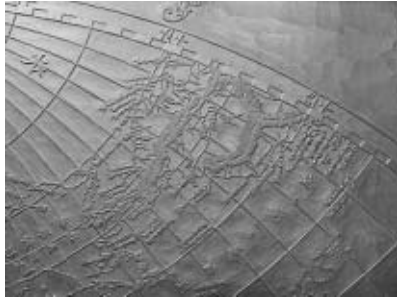


図2 『重訂万国全図』版木（部分）



図3 重訂万国全図（大学南校、1871）と版木の対応

この版木によって摺られた明治4年版『重訂万国全図』は106×188cmという非常に大型の世界図であり、現存数はきわめて少ないが、その版木はもちろん世の中に1点しか存在しない極めて貴重なものである。このような大きな世界地図を印刷するために版木自体が分割されており（図3）、版木16枚で1セットとなるものであるが、個々の版木の欠落もなく版面等を含めほぼ完全な形で収蔵することができた。また、この版木については従来ほとんどその存在に言及されることがなかったが、『重訂万国全図』自体が日本地図史上でもよく知られた重要な地図であるため、その版木の現在の所在を明らかにすることだけでも大きな意義がある極めて重要な史料であった。

当館では従来から明治4年版『重訂万国全図』を所蔵していたので、版木とそれから摺った地図を対比できる、という極めて稀でかつ学術的にも貴重な機会となる展示を行うチャンスを得た。そこで、世界図を中心とした古地図の展示を行うこととしたが、この企画を立案する際には、当館所蔵の古地図の多くは平成16年度・17年度に日本学術振興会から科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けて高精細画像を作成しておりこれらの画像を電子展示等に利用できることや、従来古地図の展示を行ったことがなかったこと、古地図は専門家だけでなく一般の観覧者にも興味を持たれる資料であると考えられることなどの条件も考慮した。

3.2.2 企画展の実際

19年度の企画展も、前年度に引き続き研究開発室の大塚室員＋図書館職員8名（企画展ワーキンググループ）の9名で実施したが、前年度が本プロジェクトの初めての試みであり展示会としても成功したこと（入場者数としては歴代3位であった：表6参照）を踏まえ、基本的に前年度の方針をそのまま引き継ぐ形で活動することとした。すなわち、展示会は中央図書館で行うこと、開催期間には多くの学外者の来館が期待できる学園祭の期間を含むこと、という条件のもとに、観覧者としては一般の方を想定することを基本方針とした。またこの企画展においても、①（貴重書展示室における）展示、②図録の作成、③電子展示を行ったほか、④講演会（1回）を実施した。また、③の具体的な内容となる企画展ホームページ（電子展示）¹²のコンテンツとして、「PDF版図録」の作成・提供のほかに、

- ・図録をベースにデジタル展示として再構成した「電子展示」
- ・企画展のスタッフがお知らせしたい様々な情報を同時進行の形で伝えていくことを目指した「展示Blog」

を実施した。これらも前年度に行って好評を得たものであるが、特に19年度は展示Blogにおいて学外から何度もコメントを寄せてくれるリピーターも現れ、様々な建設的なご意見をいただいた。また、会場で書いていただいたアンケートにも「もう今日で3回目。でも面白い」、「普段見られない貴重な地図が見られてたいへんためになりました。世界観が広がった気がします。版木の小さな字におどろきました」等と書いてくださった方もいて観覧者の生の声を聞くことができたが、こうしたアンケートの内容をBlogで紹介すると更にこれにコメントがつくこともあり、Blogが図書館と様々なゲスト（またはゲスト同士）を結ぶ双方向コミュニケーションの手段としても、また図書館展示の新しい成果を生み出しうるツールとしても、きわめて有効であることが改めて確認できた。

19年度の企画展も歴代5位となる1,700人余の入場者があり盛況のうちに終了したが、学園祭期間中の平均入場者数は平日の2倍近くあり、しかもその6割が学外からの観覧者¹³であったことから、企画立案時の方針とそれに基づく展示活動が適切であったと評価できよう。

表6 特別展等入場者記録（*カウントの仕方の問題により、ここに記載した入場者数は確実に把握できたものだけで、実際の入場者数よりも少ない数である）

名称	開催年月（開催日数）	総入場者数 （うち学外者）	平日平均入場者 数（学外者）	土日祭平均入場 者数（学外者）
天正少年使節と『原マルチノの演説』	H7.6.1（木）-6.8（日）（8）	821（不明）	103（不明）	53（不明）
宇野文庫展	H8.9.19（木）-10.11（金）（15）	229（50）	15（3）	—
幕末・明治の生活と教育	H8.10.23（水）-11.10（日）（19）	1,142（140）	69（4）	41（14）
明治のいぶき	H9.8.4（月）-8.9（土）（6）	3,822	—	—
近代教育学の源流	H10.9.7（月）-10.16（金）（32）	344（139）	10（4）	5（1）
身体と遊戯へのまなざし	H11.12.6（月）-12.17（金）（11）	610（22）	59（2）	20（4）
日本美術の名品	H12.5.22（月）-6.9（金）（19）	4,333（1,648）	235（73）	201（138）
日本古代の学問と萬葉集	H13.10.22（月）-11.2（12）	880（268）	70（11）	90（79）
「学問の神」をささえた人びと	H14.12.2（月）-12.18（水）（17）	872（166）	58（9）	29（13）
「筑波大学開学30周年（創基131年）記念	H15.9.29（月）-10.10（金）（12）	1,243（177）	108（13）	80（25）
オリエントの歴史と文化	H16.10.25（月）-11.5（金）（12）	1,256（132）	117（19）	66（18）
江戸前期の湯島聖堂	H17.10.8（土）-10.30（日）（21）	1,780（815）	73（20）	107（76）
中国三大奇書の成立と受容	H18.10.2（月）-10.27（金）（22）	1,800（904）	75（36）	125（72）
古地図の世界	H19.10.1（月）-10.26（金）（22）	1,708（345）	69（6）	132（80）

4. 今後の課題

本プロジェクトでは企画展というスタイルによって様々な試みを行ってきたが、これまでのところ、おおむね狙いどおりの成果をあげたといえる。こうした経験を今後の展示会に生かしていくことは非常に重要であるが、さらにプロジェクトとして検討する必要がある課題も多い。今後も「企画展の実施」を通じて、大学図書館の特性を踏まえた展示会に関わる諸問題（資料の保存・公開・活用の関係、展示会の評価、研究のサイクルの中での図書館の機能、資料保存と資料展示の実際等）の検討を継続して行いたい。

参考文献

- 1) 篠塚富士男, 図書館と展示会—平成18年度企画展「中国三大奇書の成立と受容」の開催, 筑波フォーラム, 74号, 2006.11, p.164-167.

- 2) 篠塚富士男. 大学図書館における展示会活動－図書館展示の分析および筑波大学附属図書館の事例報告. 大学図書館研究. 80号, 2007.8, p.43-53.

注

- ¹ 各大学図書館の館報・ホームページ等を参考にした。
- ² 松下真也. 図書館と展覧会. 早稲田大学図書館紀要. 43号, 1996, p.1-46.
- ³ 松下真也. 展覧会の企画と運営. 早稲田大学図書館紀要. 50号, 2003, p.25-70.
- ⁴ 木戸浦豊和. 東北地区大学図書館協議会合同研修会：東北大学附属図書館における企画展の取組み. 東北大学附属図書館報 木這子. 31巻2号, 2006, p.7-11.
- ⁵ 米澤誠. 広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法. 情報の科学と技術. 55巻7号, 2005, p.305-309.
- ⁶ 伊藤哲谷. 社会の共有財産としての図書館：大学図書館の社会との連携と貢献. 大学図書館研究. 76号, 2006. p.1-13, 松原敏夫. 琉球大学附属図書館における展示会活動について. 大学の図書館. 24巻5号, 2005. p.76-78. など
- ⁷ “法人化のなかの国立大学図書館経営：国立大学図書館協会経営問題委員会報告書”. 国立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 〈http://wwwsoc.nii.ac.jp/janul/j/projects/mi/keiei_hokokusho.pdf〉, (参照2008-6-13).
- ⁸ 中国文学史では『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』(または『紅樓夢』)を「四大奇書」と呼ぶが、この企画展では成書過程の違いや日本人の受容度の違いを考慮して、『金瓶梅』を除いた三書を「中国三大奇書」と呼ぶこととした。また、日本における受容が大きなテーマであったため現在の日本での一般的な呼称を考慮して『三国志』は『三国志演義』(『三国演義』)を指すものとした。
- ⁹ たとえば、特別展の企画・展示準備という形で、図書館が幅広いさまざまな分野の研究者同士に新たな交流の場を提供し、集中的に調査・研究を行った結果、新たな発見・成果を得ることができれば、図書館展示を「資料の公開→調査・研究→発見・成果→次の研究へ」という資料を活用した研究のサイクルの中に位置づけることもできよう。本学の事例では、平成12年度の特別展の準備・調査の過程で、狩野探幽・尚信・田村直翁の新出屏風絵の「発掘」というきわめて大きな発見があったので、この年の特別展は当初の企画を変更してこの成果を取り込み「筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品～石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像～」として開催された。
- ¹⁰ “筑波大学附属図書館平成18年度企画展 中国三大奇書の成立と受容”. 筑波大学附属図書館. (オンライン), 入手先 〈<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/sandaikisho/>〉, (参照2008-6-13).
- ¹¹ たとえばBlogにも次のようなコメントが寄せられた。
 - ・「それにしても大学図書館にマンガが展示されているのは、衝撃でした。一見の価値あります」
 - ・「私のような知識のない初心者でも分かりやすい展示内容と説明で、無理なく見て回ることができました」
- ¹² “古地図の世界－平成19年度筑波大学附属図書館企画展”. 筑波大学附属図書館. (オンライン), 入手先 〈<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/kochizu/>〉, (参照2008-6-13).
- ¹³ 企画展開始後の早い時期にNHKの取材を受け、本企画展についてテレビ・ラジオの関東ローカルのニュースで放送されたが、この放送も学外者の来訪に大きく影響していると考えられる。